

婦人の組織

文 部 省 選 定

小さな灯をまもる人びと

3 卷



< 企 画 >

財団法人結核予防会

< 作 製 >

桜 映 画 社

— ス タ ッ フ —

製 作	村 山	英 治
	大 西	夫 雅
脚 本	片 岡	大 薫
演 出	木 村	莊 十
撮 影	木 塚	誠 一
照 明	内 藤	伊 三

— 出 演 —

大河内	稔	根 岸	宮 子
渡 辺	明	篠 塚	三千子
左右田	一 平	西 堀	鈴 江
糸 井	光 弥	秋 月	喜久枝
西 島	悌四郎	野 村	昭 子
片 岡	藍 子		ほ か

協 力 長野県小布施町

— 製 作 意 図 —

生活に密接した幾多の身近かな問題は、婦人の心からの組織的な働きがなくては、到底根底から解きほぐされてゆくことはむづかしいものである。

婦人の、手をつないだ活動が、結核予防運動の最大の支柱であることを、あまたの事例から帰納して、茲に美しい物語を織り成した。

映 写 時 間 30 分
16ミリプリント 45.000

— ス ト ー リ ー —

☆今から×年前、なお子は、東京に働きに出ていて結婚。その夫は結核で死亡。郷里に帰り、農家に再婚した。その折のことが忘れられない。夫の村本や老母と野良に出ていると、保健所や結核予防会の人たちが、宣伝カーに乗って来て、住民検診を呼びかけて行った。結核で死んだ前の夫の思い出がまだ新しいなお子は、ギョッとした。

株 式 会 社 桜 映 画 社

東京都新宿区角筈2-84 スタンダードビル
電 話 3 6 1 - 9 8 2 0 ・ 3 7 1 - 8 2 4 1 ~ 5

☆その夫は、斗病の結果、やせ細って死んで行ったのである。あのみじめな、暗い、悲しい、日蔭のような生活。それを思うとたまらない。

なお子は、この前夫の死因については、こんどの夫には正直に言ってなかった。

☆村には、結核予防婦人会があって、ささやかな活動をしていた。検診の日には、その婦人会に入っている隣家の主婦つねが誘いに来たが、なお子はかくれるようにして行かなかった。

検診の結果が恐ろしかったのである。前の夫のことを知っているだけ、よけいななお子は恐い。若し罹っているとされたときの恐怖。

前の夫の死因をかくしているだけに、そのときのことを考えると胸がつぶれる。それに、なお子は妊娠していた。

☆なお子は、子供を産んだ。初めてのお産。可愛い自分の子供。心配したが、赤んぼは元気で育ち、まるまると太った。そして、また住民検診の日が来た。

☆つね子や婦人会の人たちが、個別訪問に来た。結核についてのことが、話題にのぼる。それでも、検診だけは受けまいとするなお子は、裏庭でつね子につかまっていた。

「でもあなたの胸の写真は、あなたの大切な赤んぼの生命をまもるのよ」

つね子は、なお子の眼を深くのぞき込むようにして言った。

なお子は、激動するようなショックを受けた。

☆なお子は、結核についての講演会にもこわごわ出た。

「結核はもうこわくない。高血圧やガンの方が恐い、と言われていたが、結核での死亡率は30台ではいぜんとして高く第1位であること。耐性菌が出来て、いま警戒と努力をゆるめれば、昔の恐怖にたちまち逆戻りする事」などを知る。

☆村の診療所に人自をはばかる様に、なお子の姿が見えた。なお子は、心臓をどきつかせ乍ら、生きた心地もなくレントゲンの前に立った。結果がわかるまでは食事も喉に通らず、村本に怪しまれる程だった。結果は白。異状なし。家に帰る道でうれしくて、赤んぼを抱き上げ、強く強く頬ずりした。涙がひとりでに流れて出て、とまらなかった。

☆「罹れば仕方がない」と諦めている人。「オレだけは大丈夫だ」と過信している人。「去年受けて大丈夫だったから」とたかをくくっている人。「仕事の方が忙しく」「検診の場所が遠いから」などと充分な理由のある人たち。

なお子には、そのいづれもが身につまされた。彼女自身、その様に言って検診を受けずに過して来たからである。

しかし、いまは彼女は違っていた。結核の恐ろしさ、検診の必要、そして白だった時のよろこびを知っている彼女だから。

☆すっかり元気の出たなお子は、去年の検診で発見され

た中田のぢいさんを、婦人会の人達と一緒に療養所に慰問に行って、改めて婦人会の人びどの温い支えが大切であることを知った。

☆そして、また住民検診の日が迫って来た。検診台帳の整理に拍車がかかり、実施通知表の発送。宣伝ビラのガリ版切りや印刷。婦人会の人たちは忙しい。なお子も頑張った。

☆明日の検診の準備をととのえ、配布する受持のビラをかかえて家に帰ったなお子を、村本の怒った顔が迎える。

「いいかげんにしろよ。いまどき、ただでそんなに働くバカはいない。他人のことじゃないか。どうかしているぞ、お前は。結核結核と気違いみたいになって」と。

なお子は、涙をうかべてそれに答えた。

「どうして他人ごとであろうか。村に1人でも患者がいれば、いつ自分たちもまた感染するかわからないではないか」と。

そして、なお子は、この日、思い切って、自分の前の夫が結核で死んだことを告白した。涙を流して話をすなお子を見て、村本は呆然としているようだった。

☆明くれば検診日。レントゲン車が来た。受付やその他の世話は、保健所や予防会の人たちと一緒にあって、婦人会がやっている。なお子は受付係をやりながら村本が、子供やおばあちゃんをつれて来てくれるか、どうかか気になっていた。今朝、念をおしてくるには来たが昨日の口論もあり、或は来ないかも知れない。なお子の気持は重かった。

村の衛生主任が、受診者の出足がいいとよるこんでいるのも、彼女の胸には痛い。

☆そのときだった。つね子が、なお子の肩をたたいた。見ると、村本がガーデン・トラクターを運転し、子供を抱いたおばあちゃんのをせて走って来るではないか。

なお子は、胸の中が熱くなった。

☆結核予防婦人会の人たちは私を目覚めさせてくれた。

そして、私の可愛い子供も、主人も、おばあちゃんも、みんな健康だった。

なお子は、固く心に誓った。

私も、婦人会の人たちと一緒に、これからも「小さな生命の灯をまもりつづけよう」と。

